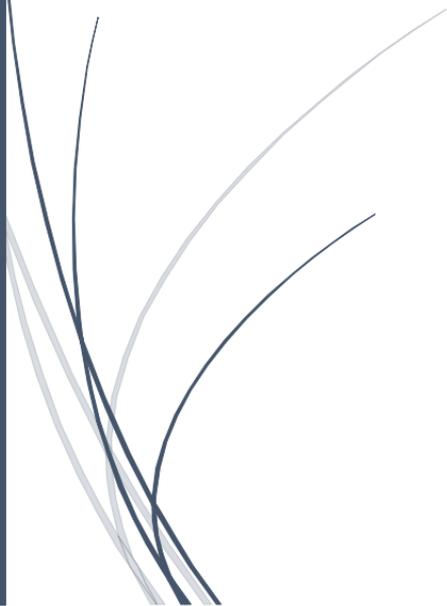


M 属性、開発中

～S な彼氏はベター-half～ 2



滝上さんと知り合ったのは、友達の綾香とその彼が企画してくれた合コンだった。綾香と彼がそれぞれ男性と女性を3人ずつ集め、幹事を含めて4対4での飲み会。綾香は私と同年の学生だけれど、カレは年上の社会人ということもあって、かなり期待していた。女性側のメンバーは、私と、綾香とも面識がありちようど彼氏と別れて間もない親友のヒナ。それからもう一人は綾香がバイト先の友達を呼ぶという。

ヒナは子どもの頃キッズモデルをしていた「元芸能人」で、控えめだけれど今でもすごくかわいい。とにかく素材がいい。綾香が連れてきたもう一人の女性は、ほとんどメイクをしていないんじゃないかというくらい薄化粧だったけれど、とても華やかな顔立

ちで背も高く、そこにいるだけで目を引いた。内心「うわー、きれいな人ばかり集まっちゃった。完全に引き立て役だなあ」と思いながら、皆とあいさつをして乾杯した。

私はヒナやもう一人の華やかな女の子とは違って、生まれつきの美人じゃない。まあ、ふためとみられない不細工でもないと思うけれど、ごく普通、十人並み……だと思おう。それを自覚したのは高校の時。変わりたくて、お小遣いをはたいてメイク用品を揃え、雑誌と動画とSNSで勉強し、自分の顔を分析して、メイクにのめりこんだ。その結果、メイクスキルはものすごく向上して、今ではすっぴんとメイクをした顔はまるで別人だ。

中略

「……あの、えっと」

何と言ったものか迷いながら言葉を探す。

「でも、滝上さん、一泊分払ったんだよね？」

「……？ うん、そうだけど」

この先を言うのがちょっと勇気がいった。

「じゃあ、せっかくだし、泊まっていかない？」

もう何度も体を重ねているし、何を照れるんだと言われそうだけれど、でも、自分からお泊りに誘うのは、やっぱりちよつと恥ずかしい。

「……俺はかまわないけど、大丈夫？」

そう聞かれて、うなずいた。

「ヒナの家にお泊まることにするから大丈夫」

母親には、雨がひどいから今日はヒナの家にお泊めてもらおうと連絡をするとすぐに「了

解」のスタンプが返ってきた。

中略

「……咲良が、欲求不満そうだ」

「えっ!？」

そんなことない、と言いつ返そうとしたけれど、滝上さんの手がバスローブの上から胸に触れてきて、その感覚に体の力が抜けた。

「……んっ」

「ほら」

「……だって、それは、急に」

触るから。

そう言おうとすると、滝上さんの手が胸から離れて、唇に触れる。

「俺も本当は咲良を抱きたいけど、ここでは難しい。わかるか？」

「……うん」

ここは、壁が薄くて、私の声が漏れちゃうから。

私も、気持ちよくなったときに声を抑えられる自信はまったくない。

今日ほしくないということはわかっていたけれど、改めて言われてなんとなく気落ちし

ていると、「でも」と後ろから滝上さんの声がした。

「咲良が欲求不満のままなのは、不本意だから……」

そう言って、耳に口づけ、ささやきを流し込んだ。

「咲良が一人でしてるの、見せて」

「……っ、え!？」

「オナニーなら、声、我慢できるだろ」

想像もしなかった要求に、頭も体も固まって反応できなかった。

そんな私を意に介さず、滝上さんはバスローブの上から私の太ももを撫でる。

「ほら、教えて。一人でするときは、いつするの？ 家でだと、家族がいないとき？ それとも、家族がいてもこっそり声を殺してするのか？」

「……っ」

答えられずに唇を噛む私の右手を取り、胸へと導く。

「オナニーするときは、服は着たまま？ それとも、脱ぐ？」

「……」

私の手に重ねて、胸を揉むように動かした。

「どこでする？ ベッドの中？ 床に座って？」